

一番茶句会報

2018 平成三十年
二月 月号
号 (589)

作句の心得

山本 法子

作句の基本については、昨年九月号に中村たか同人が、沢木・栗田両師の教えを書いています。

その中の写生について、栗田先生の「実作への手引」から抜き出してみました。

『①物を言葉に置き換えるのが写生の第一歩

②その物のあり様を言葉で表すのが次の段階

例えば、道の辺に地蔵を見たのが写生の始まり。その地蔵が、大きいか、小さいか、古びていたか、胡坐をかいていたかを言葉で表すのが第二の段階。

③それ（物）を見て、どう感動したのか、感動のポイントは？を写すのが第三の写生。

言葉をうまく並べて俳句らしい句を作っても、読む人に感動が伝わらなければ駄目である』
と書かれています。

(以上 やすし俳句教室「実作への手引き」より)

また、別の立場で、上田五千石先生は俳句初心の人に伝えたいとして次の様に書いておられます。

『尊敬する俳人の秀句を徹底して読む。かつ諳んじることから始めるのが俳句の勉強法としては一番。そして月々の投句を一回も怠らないこと。投句をして選を受け誌上に載ってこそ、人の句も身を入れて読めるし、学べる。句会に必ず出席すること。自作を選んでもらうことより、他人の句を沢山読まされ、その中から自分なりの

選を決することが勉強になる』と。

比喩について

比喩とは物事の説明に他の物事を借りて表現すること、例えることとです。日常会話にも文章にもしきりに使っているが、格別にそれと意識して用いているのではない。それらは使い古されていて比喩であることを忘れているから。「火のような恋・鉄のような意志」など。

ここでは詩としての比喩について述べてみます。

白露に鏡のごとき御空かな 川端 茅舎

鏡のごとき御空 という表現で「鏡」と「空」という遠い関係にあるものが結びつけられている。ごときが比喩。

襟巻や畜類に似て人の耳 西島 麦南

二つの事物を繋ぐ言葉として、この句のように、「似て」というのがあります。

「めく」「なす」「さま」「さながら」などもよく用いられます。

(以上上田五千石著 「俳句に大事な五つのこと」より)

・私の好きな句・十二月号より・

杉山 美波

甲羅干す亀と目が合ふ小春かな	中村 たか
粉粉に踏まれし銀杏落葉かな	磯田 秀治
こがらしや風の鬨ひ夜明まで	片井 克子
鯛焼を背広姿の頬ばれり	下河辺美乃里
冬初め母に似て来し指の節	中村いく代

もちの実句会

No. 552

H・30・2・17

椛柑の満たしてゐたり無人店

磯田 秀治

足首に春泥つけて帰りけり

青空へ赤き本殿梅にほふ

寒明や空より碧き駿河湾

寒中や托鉢僧の鼻赤し

伊坂 壽子

強東風や寄りて離るる船溜り

ストーブにふつつと粥夜の更くる

花村すま子

腰へ貼る二枚の湿布夜半の冬

寒の内開き初めたり雪柳

細波を黄金に染むる春日差

山本 法子

天守より見渡す屋並春めけり

強風に屈めばそこに犬ふぐり

丁子屋の葺替の茅散らす風

独活提げし男抜ける鞠子宿

磯田なつえ

路地奥に出しとる句ひ四温晴

(山本法子報)

瀬名笹百合句会

No. 419

H・30・2・19

湯船出て見つめる窓に寒の月

大石ひさを

春隣日の道探し散歩かな

消防車音遠くなる夜の眠り

木木の葉の匂ふ堤や春隣

着ぶくれて皆既月食みてゐたり

海に向き赤人歌碑や風光る

漆畑 一枝

杉の秀の揃ふ裏山春近し
親と夫並びし墓へ春日燦

大森 弘子

芽吹きたる桜並木は散歩道
桜餅香りを包み届きけり

前田 一三

春近しみな微笑ある六地藏
藪を出て枝から枝へ初音かな

何気なき景色の中に兆す春
豆撒きて夫と分け合ふ恵方巻

片井 克子

豪雪のニュースに胸の傷みけり
富士晴れを駆け巡る風春立てり

寒雀日当たる方へ飛びゆけり
冴え返る夕陽に染まる千切れ雲

松本 恵子

泣きべその素足の幼寒稽古
日溜りの丸き庭石冬の蝶

(松本恵子報)

安西句会

No. 342

H・30・2・11

立雛のちぎり絵母の遺作なる
雑草の田に薄氷のひかりけり

松永 和子

月細り空むらさきに冴返る
梅園の静寂に夫と二人きり

吉田 明美

氏神の鶏の野放し鬼やらひ
朱の碗に花麩の開く立子の忌

菊山 静枝

天領の夕日あかりに幣辛夷
亡き友の育てし小豆七日粥

佐藤 博子

節分の豆水底に神の池
友の葬雲一つなき寒の富士

彩りの切り絵貼りたる春障子
引越しの済みたる部屋や春日差
まだ柔き餅受止むる節分会
引越しの荷物積み込む霜の朝
強霜の囲みてゐたり屋敷神
素つぴんをマスクで隠し買物へ
大見得を弁慶切れり初芝居
父の忌や寒九の水をたつぷりと
三代の襲名口上冴え渡る
グラタンをふつつ炊けり女正月
寒暁に結ふ引越しの塩むすび
取り壊す家にも撒けり追儺豆

立川まさ子

辻 桂子

橋本 紀子

坂本 操子

(佐藤博子報)

はとり句会 No. 321

H・30・2・9

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

新川 晴美

引越の荷に雪搔きのシヨベルかな
強霜や庭に積まれし杉丸太
合格の知らせや寒の月まろし
草つらら朝日を受けて煌めけり
蕎麦せいろ積み干す背戸や日脚伸ば
湖際の駅舎に群るる冬かもめ
風花や画廊に深き紅茶の香
酒蔵を囲む冬田の広広と
板の間に声はね返る寒稽古
自転車の口ゴム替ふる四温かな
冬川の浅瀬に鷺のよろけたる
笙の音や梅咲き初むる大社

介護所の一部屋灯る冬の朝
立春の朝のひかりや辞書を引く
朝の庭いくたびも踏む霜柱
病室にまねごとほどの福は内
難易度の上るリハビリ今朝の春
試歩一步早春の富士あの窓に
紺碧の空へふはふは春の雲
麻の葉の刺子の布巾春立てり
用水へ渡す板橋野梅の香
冴返る竹の触れ合ふ高き音
春の日にひらりと跳ぬる金の鯉
献灯のゆらぐ道場冴返る
ブティックの赤き値札や春近し

大村 泰子

神尾 知代

山本 法子

磯田なつえ

花村富美子

(磯田なつえ報)

樟ヶ谷句会 No. 150

H・30・2・22

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

桃の花ひとかかへほど無人店
白富士や出窓を占むる室の花
父に似る赤子の瞳初ひひな
散歩中爪の先まで冬日差す
月命日息子家族と飲む葛湯
石垣に春日浴びをり鳩の群
日を弾くヨットハーバー春めけり
おかつぱの笑顔の羅漢やぶ椿
諸手挙げ叫ぶ若者春の磯
春耕や田圃の中の屋敷墓
蓬餅つく音谷へ冴せり

日の当る卒寿の庭に冬菫
父危篤コートひつけ夜行バス
紅梅や富士の霊水渾渾と
合格の報せ夜更けとなりにけり
日だまりに蓆なしたり犬ふぐり
三方に針きらきらと針供養
線香に書く願ひごと涅槃西風

中村いく代

磯田なつえ

中村 たか

(下河辺美乃里報)

かんがるー句会 No. 114

H・30・2・8

西川満寿美

小林 智子

中村いく代

磯田なつえ

(小林智子報)

会釈して擦れ違ふ子ら春隣
日脚伸ぶ路地にダンスの少女たち
飛び跳ぬる小犬の影や草青む
寒月や両手に包む缶コーヒー
静けしや青空透かす冬木立
下茹での大根透ける日暮どき
おでん鍋囲みはらから酌み交はす
探梅の蕎麦屋のおやぢ昼休
軒かく腹ばひの犬冬ぬくし
野仏へ折り紙の升年の豆
昆布出しほどよく効かせ蕪汁

番町句会 No. 56

H・30・2・16

前田 恭子

関根 幸子

池村 明子

佐藤 ハル

榎戸万里子

磯田なつえ

山本 法子
(前田恭子報)

春日差うす紅色の鳩の首
かぐはしき紅茶の土産春隣
ネーブルの香残れりプチナイフ
厄年の声を大きく豆撒けり
町医者へ入る大きめのマスクして
岡山へ地元で採れし冬苺
整へる髪を短く受験生
校庭の子ら巻き込み春疾風
風花や広く開けたる天守閣
亡き叔母の廃屋なるや臥竜梅
梅東風の頬を優しく撫でにけり
声高く長縄跳びやークラス
手に余る庭のネーブル貰ひけり
雛あられ桃色ばかり選ぶ子よ
捨てがたきチョコの空箱二月尽
春浅し雲のひしめく富士の裾
髭面の男大きく「福は内」

レモン俳句教室 No. 35

H・30・2・13

松永 和子

おでん鍋プーと膨らむさつま揚げ
長椅子に抱く風邪の子夜もすがら

放課後の移動パン屋や日脚伸ぶ
風邪の子の冷たきプリン類ばれり
警官と校長並ぶ鬼は外

池村 明子

寒波来る富士の裾野の雲迅し

西川満寿美

二ヶ月やパリのチョコ手に子の帰る

前田 恭子

ねこ柳数えつつゆく母の試歩

八木 洋子

送別の讚美歌響く冬館

ひとり居の姉に持たせるおでん鍋

斉藤真理子

京都より届くひひなや初節句

榎戸万里子

伸ぶるだけ伸ぶる顎鬚風邪籠

磯田なつえ

春隣垂れ幕替はる百貨店

風花のビルの足場に舞ひ登る

何もなき日や早春の富士を見に

春めくややはらかさうな今日の富士
◇兼題「風邪」「おでん」「室の花」で作句。自選カレックスン（俳句）H
29・11月号「師の選、私の選」を読む
（前田恭子報）

向日葵句会 No. 29

H・30・2・14

パンジーや歯磨き誉むる医師の笑み

下河辺美乃里

刺股の掛けある古刹春寒し

多々良和世

冬柏杣の旧家の屋根普請

春寒の改札口に待ち合はす

白線を引きたる歩道冴え返る

恐竜の本読み待つ節分会

手に息を鼻赤くして寒稽古
バレンタイン会の老爺の顔ゆるむ

立川まさ子
土本かず子

風花や辻のピエロの手風琴
相撲はね寒三日月を仰ぎけり
日脚伸ぶ屋根の普請の槌の音
ビル風にマフラー硬く巻き直す
梅薫る幸町へ転居せり
白梅の咲き満つ寺に忌を修す

橋本 紀子

佐藤 博子

坂本 操子

（佐藤博子報）

静岡同人句会 No. 85

H・30・2・3

池の面に揺らぐ丹の橋梅三分

凍空へ真綿のやうな昼の月

仮住みに少しなじみて寒明くる

日の障子恩師と囲む山の膳

風花のひとつひとつの行方追ふ

寒月に地球の影の赤黒し

富美子

法子

操子

たか

恵子

なつえ

（山本法子報）

◇◇◇ おねがい ◇◇◇

◎新年大会で一月一日現在の「一番茶会員名簿」を配布いたしました。〒・住所・電話番号など住居表示の変わられた方など、句会の方の幹事を通して、書面でお知らせください。毎年年末に確かめています。ですが、なかなか徹底しません。

私の一句

大石 ひさを

夏休み人で膨らむ天安門

ひさを

私の狭い部屋に旅で撮った写真のフィルムが、沢山積まれています。その中で一番多いのは、二十年位前に中国旅行で写した写真です。

その頃は半分若かったこともあり、中国旅行（写真撮影）と聞けば、全てを忘れて参加したものでした。

今の中国での撮影はその頃よりむしろかしく感じられます。が、その頃の中国は写真も自由にとれた時代でした。

もつとも魅かれたところはシルクロードで、自分にとっても心に強くなる写真が多くあります。

でも中国でとった写真の中で、一生一番の写真は、句に記した「天安門」の写真です。

中国で写真の選考があり、最高賞とのお知らせを受けて、上海で行われた発表会に参加し表彰を受けました。

その頃の天安門は、常に沢山の人であふれ賑やかなものでした。今の中国にはこの頃の楽しさもうすれた感じで、残念に思っています。

高齢の私にはちよつと、再び行けそうもない今日この頃です。

一乗寺雛人形供養祭

お雛焚

下河辺美乃里

学生の頃、麻機のある家で天井に付きそうな雛段に目を奪われた。一抱えもありそうな天神や内裏雛。あの人形たちは今も飾られているだろうかと思つた。

いつの間にか飾らなくなつた自分の雛人形が、どう始末されたのか聞いたことも、記憶にもないのは、少々寂しい。一乗寺では、五十年以上前から雛人形供養祭が毎年行事となつており、二千体もの雛人形やぬいぐるみが、多くの人々の見守る中供養される。

三年前のミニ吟行会の折、本堂の階に並べられた人形たちは、好天に恵まれ輝いていた。供養後、一体ずつ人形をいただき焼却炉へと進み、手を合わせたことが思い出される。

毛氈に並ぶ万體お雛焚 操子

少女らの舞に始まるお雛焚 美乃里

庵原山一乗寺（清水区庵原一九三七）

電話〇五四二六六一〇一八二

雛人形供養祭 日時 （毎年四月第二日曜日）

平成三〇年四月八日（日）一〇時〜

☆バス 清水駅九時三〇分発

トレーニングセンター行庵原小下車（左前方）

◇◇◇ お知らせ ◇◇◇

☆ 一番茶「第八回総会・吟行俳句会」について

・日時 四月十五日(日) 十二時半集合、十三時より総会

・場所 護国神社(市内柚木) 神社社会館

・投句 3句投句 3句選

投句締切 十二時四十五分

・吟行地 静鉄電車沿線(新静岡～柚木)及び神社境内

※吟行・昼食などは開会前に済ませて集合のこと

(吟行地案内は来月号に掲載)

※天候にもよりますが、境内で骨董市が開催され、軽食の売

店などもある予定です。

・会場使用料として奉納金一人500円・電車賃片道120円

※会場費は一部一番茶会計から負担の見込みです。

☆ 二月十日(土) 第二回幹事会が開かれました

・新年会の反省 事前に詠草を配布、選句をしたいとの意見あり、

高齢、会員減により当番の事務量削減を考慮し、昨年から、当日選に変更。早めに会場へと連絡済。

・総会議事事項 事業報告・事業計画、決算報告・予算案などの事

前審議と承認。合同鍛錬会は富士山山開きで検討。

句会報の手作りで会計に余裕ができた分を六百号

記念行事の備えとしたい。

・打込み手数料

昨年の幹事会で承認の通り、半年分の支払をした。今後は一人一役の視点で支払は要らないとの結論。

詳細は句会の席で幹事より報告のこと。

「自選力を高めるために」—動詞の活用について①—

① 句を作ったら品詞にわけてみましょう

※「品詞」とは、あらゆる単語を文法上の性質から分類したもので

動詞・形容詞・形容動詞・名詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞の10種であり、太字が活用する品詞です。

例 玉砂利の湿りを踏みて除夜詣 まさ子
_____名詞 _____助詞 _____動詞

② 動詞の活用・活用形(動詞とは動作や存在を表す言葉です)

例「踏む」という動詞は

踏まず	(踏ま+ず=打消しの助動詞)	…未然形
踏みて	(踏み+「て」「たり」用言に続く)	…連用形
踏む	(文の終り)	…終止形
踏む時	(踏む+時=体言や「なり」等に続く)	…連体形
踏めども	(踏め+ども=助詞)	…已然形
踏め	(命令する)	…命令形

※「踏」は語幹といって変わらない部分、太字の部分は語尾で変化する部分です。ま・み・む・む・め・めとマ行の四音で活用しているので、マ行四段活用といいます。

③動詞の活用には四段活用・上二段活用、下二段活用、上一段、下一段、カ行変格、サ行変格、ナ行変格、ラ行変格など9種類あり、次回にまた・・・

「一番茶」作品鑑賞（十二月号）

花村富美子

小春日や外湯をめぐる下駄の音

橋本 紀子

気心の知れた友とご旅行。宿に落ち着き、浴衣と羽織を粋に着てぶらぶらと外湯を回った。気持ちのほろみ下駄の音に表れ、笑い声まで聞こえそうな楽しい句となりました。季語は「小春日」

廃業の医院の庭や花八つ手

坂本 操子

昨今は、掛り付けの町医者を作っておかないと、いざと言う時に総合病院に紹介して貰えない。廃業の医院は、ご本人が病気か又は後継者が居なかったのだろうか。かつては賑わったであろう医院だが。庭の花八つ手が寂しい。

冴え渡る看取りの窓の鎌の月

神尾 知代

病院の夜は静かだ。長い夜、病人の寝息さえ気に懸かる。窓には月が見えた。早く病状が良くなります様にと祈った事だろう。鎌の月に心細さや不安も読み取れ切なくなる。快癒を祈りたい。

星形に切り貼り終へる白障子

土本かず子

障子に穴を開けてしまったのは、元気なお孫さん、それとも猫かな。星形に切ったとあるから余り大きい穴では無いだろう。星形が可愛い。年末の障子の張替えには少し間があるので応急処置。障子は、明るくて暖かい。句も明るい気持ちにしてくれた。

数へ日や施設の老の日を忘る

榎戸万里子

季語は「数へ日」年内の残り少ない日。年末の主婦は忙しい。慌ただしい中を入所している肉親を施設に見舞った。もうすぐお正月ですよ、と言っても反応が鈍い。今は、長寿の時代だと喜んでばかりはいられない。考えさせられる一句です。

☆・☆・☆・あ と が き・☆・☆・☆

「一番茶」が新紙面になってより、磯田支部長の「伊吹嶺中日俳句教室」よりの表記についてが書かれています。今迄分かっている、知っていると思っていた事も、改めて文章を読んで見ると使い方の間違いに気付いたりして、基本をすっかり覚えなければと再確認しました。又、同人の方々も順に「俳句について」の想いや考え方を書いています。是非参考にしてください。今年には役立ててほしいと思います。今年には寒さが厳しい日が続き、インフルエンザも猛威をふるっています。体調には充分気をつけて作句に励んでください。（明子）
○校正を中村たか同人に手伝っていただきました。（法子）

平成30年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵（新聞）	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅（羽鳥）	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵（新聞）	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵（新聞）	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵（新聞）	13時

一番茶句会報 2月号（589）

平成30年2月28日 発行

発行責任者 磯田なつえ（☎054-278-7443）
〒421-1201 静岡市葵区新聞458
編集部 山本 法子（部長）
操子・美乃里・博子・明子・和世
印刷 番町市民活動センターにて印刷